

ロシアの恐れ

野瀬 隆平

この街が包囲されてから、もう何日過ぎたであろうか。敵に遮断されて水も電気も使えない状態で抵抗を続けている。

今から 80 年も前の 1941 年、第二次世界大戦の最中に、独ソ不可侵条約を破ってドイツ軍が攻めこんだ時のレニングラードのことである。圧倒的な軍事力で包囲され、市民たちは必死に抵抗を続けていた。ジェノサイドや捕虜虐殺の蛮行が繰り返されていた。この籠城は、何と 872 日続き、1944 年の 1 月になってやっと解放された。

その間に、100 万人以上の住民が命を落とし、この街以外の人たちを含めると、ソ連側は軍人と民間人あわせて 2,700 万人もの人が命を失った。「人類史上最大の惨事」と呼ばれる所以である。

今回の、ロシアによるウクライナのキエフの攻略・包囲をみていると、このレニングラードのことを想いかべてしまう。複雑なのは、独ソの戦いのときウクライナも攻撃された側で、ソ連の同胞として一緒に抗戦したという事実である。

このように多くの犠牲を払いながら、長い間、抵抗して戦い続ける力はどこから出てくるのであろうか。自分の生まれ育った街、祖国を何としてでも守り抜こうとする強固な意志であらう。

レニングラードはプーチン大統領の生まれ故郷である。ドイツに攻撃された時はまだ生まれていなかったが、母親はこの包囲でかろうじて生き延び、兄は死んでいる。

ロシアは 19 世紀にもフランスのナポレオンに攻め込まれている。チャイコフスキーの「1812 年祝典序曲」はこの攻防を題材にしたものだ。かくのごとく、ロシア・ソ連は、何度も西側の国に攻め込まれた経験を持っている。

ロシアの蛮行は、決して許されるものではないが、プーチンの頭の底に、西側からの脅威に対して祖国を守るためには戦う、という思いがあったとしてもおかしくはない。

このような歴史的な背景を知っておくことは、問題の本質を理解してどこに解決の糸口を見出すのかを考える上でも必要であらう。